
ストライクウィッチャーズ「F-16Cの介入」

アル・アサド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウェイツチーズ「F・16Cの介入」

【著者名】

アル・アサド

ZZコード

N5012Y

【あらすじ】

始まりは夢。世界の終わり。基地全体に鳴り響くサイレン。スクランブル発進・・・。

――異世界への扉が開かれた・・・。

第三次世界大戦

―――夢を見ていた・・・。俺はうつ伏せで倒れていた。辺りからは何かが燃えているような音が聞こえている。焦げた臭いが鼻をつく。恐る恐る顔を上げてみる。そこはまさに真っ赤に燃え盛る火の街と化していた。

「何だよ・・・コレ・・・。」

逃げ惑う人々。爆撃がすぐそこまで迫つてきている。そもそも何で俺はこんな所で倒れてたんだ？てゆーかここは何処なんだ？そう思いながら立ち上がる。そして一つの感情が生まれてくる。

「夢か・・・。だつたら、楽しんでやろうじゃん・・・。」

そうだ。こんなトコにいるのはおかしい。俺は一週間前にアメリカ空軍所属の外国人傭兵部隊の航空隊に配属された、新米パイロットだ。高校を卒業しすぐに地元の在日アメリカ軍の基地に傭兵として志願した。現在世界は終わりの一途を辿っている。ロシアでは軍事クーデターが起こり、政権は崩壊。それと同時にアメリカ、イギリスなどNATO加盟国などに突如の宣戦布告をした。さらに、それに乗じて中国や北朝鮮も参加を表明。これを危機と感じたアメリカは、従軍を志願する若者たちを傭兵として招き入れた。そして俺はアメリカ本土防衛のため、戦闘機パイロットとして現在ハワイの空軍基地に居る。それにしても、夢という感覚が無い。とりあえず俺は常に持ち歩いているホルスターから拳銃を取り出す。すると突然空から赤いビームのようなモノが降ってきて、街を破壊した。ビームの降ってきた方向を見た俺は、我が目を疑った。

「何だよ・・・アレ・・・。」

そこには、異状な形をした黒い物体が飛んでいた。とてつもなくデカい。初めてみたモノだが明らかに物体ではなく、生物だと俺は確信した。その時だった。

「助けて！！」

前方に何者かに襲われそうになつてゐる女の子を発見した。その何者かが、人ではない事にはすぐに気がついた。俺はすぐさまソイツの頭と胸を拳銃で撃つた。すると体全体が白く光つたと思つと、ソレは粉々に粉砕した。

「大丈夫か？ケガは？」

少女「お兄ちゃん、助けてくれたの？ありがとう・・・。」

「ここは危ない。街はずれに行こう！」

俺は少女を抱え、街はずれの林の密集してゐる場所へ移動した。そして、一本の木の根元に少女を降ろした。

「よし、ここまで来れば安心だ。ところでお嬢ちゃん、ここはドコかわかる？」

少女「え？ここはカールスラントだよ？」

少女はそう答えた。聞いた事もない地名に戸惑つてゐると、急に意識が薄れてきた。

わざかな平穏

少女「お兄ちゃん！？大丈夫？お兄ちゃん！？」

？「クリス――――！」

意識がもつろうとする中、一人の女性の声が聞こえた。

「そうか・・・クリスって言うんだね・・君・・・。」

俺はそう言うと意識を手放した。夢だと思っていたが、その時だけは違う気がした。しかし、俺は現実に戻される。聞こえてくるのは、聞き慣れた轟音。射撃訓練をしているのか、微かに銃声も聞こえる。

「やっぱ夢だよな・・・。嫌な夢だつたな・・・。」

体を起こすと大量の汗をかいている事に気づく。現在時刻は午前4：00。同室の隊長はまだ寝ている。とりあえず俺は、シャワールームに向かう。更衣室で服を脱ぐ時、俺はホルスターに拳銃が入つて無い事に気づく。寝る時だつて外す事はないのに。あまり気にせずシャワー室内に入る。

「そりいえば夢ん中で拳銃撃つたけど・・・まさかな・・・。」

体の汗を洗い流し、服を着て自室に戻る。

「おつかしーなー。拳銃無工なあ・・・。」

？「朝つぱからウルせーぞ新人・・・。」

「あ、すんません隊長。俺の拳銃知らないすか？」

隊長「んなもん知るかよ・・・あーあまだ6時にもなつてねーじゃねーか。頼むから寝させてくれ・・・。」

隊長はそう言つて再び横になる。俺の所属している部隊は単独では隊長（アルファ1）と俺（アルファ6）だけである。2機編隊なのになぜ俺は「6」なのかはわからない。結局拳銃は見つからず、俺は武器庫に向かう事にした。

「せめてあれぐらいは持つておかなきやな・・・。」

武器庫に入り管理人に話をする。

管理人「ん？何だ朝から・・・。傭兵にやる武器は無いぞ？」

「拳銃でいいんです。一つ頂けませんか？」

管理人「つたく。オマーは最初から墜ちる氣でいるのか?しょーがねーなあ・・・。」

そう言つて彼は古い銃をよこしてきた。

「ガバメントつか・・・。」

管理人「トカレフ渡されるよりはマシだろ?」

そう言われ俺は渋々武器庫を後にした。

運命のスクランブル

「6時半か……。食堂行い。」

それにしても軍隊らしくない生活である。日本の駐留基地で1ヶ月程操縦訓練をし、その後すぐに此処マイアミに飛ばされたのだから。こんな短期間で戦闘機に乗れるとは、この世界も末だな。と、毎回思う。戦闘機の操縦に関しては練習機では乗りはじめたその日にもう慣れた。実戦機であるF-16は昨日で3回目の搭乗だが、普通に操縦出来るレベルにはなった。しかし、まだ実戦は経験していない。司令部からの情報によると、ロシア、その他加勢国の動きが妙に静かだという。それがかえつて彼らの不安を煽っている。

「今日も哨戒か……。このまま終わればいいけど……。」

しかし、現実はそうではなかつた。突然基地全体にサイレンが鳴り響いた。それと同時に基地内のスピーカーが語る。

「当基地所属の全搭乗員に次ぐ！！現在国籍不明機がマイアミ市街を攻撃中！！全てのパイロット！今すぐ飛んでくれ！！」「スピーカーから聞こえる声の主は取り乱した様子と伺える。ついにきたか、と俺は恐怖感と同時に初めての実戦にワクワクしていた。「ドッグファイト、出来つかな……。」

気がつけば俺は冷や汗をかいていた。フライテースーツを着るためハングーに向かうと、すでに隊長の姿があつた。

隊長「遅いぞ新人。さつさと着ろ。他の傭兵はもう戦闘機に乗つてる！」

「つい30分くらい前は、ぐーすか寝てたくせに。」

隊長「それだけ今回はヤバい事が起きたつてことだよし。行くぞ！」

心臓がバクバクいってる。飛ぶ前から俺のテンションは最高潮だつた。防衛網は破られた。という事は敵はそれなりに出来る奴らだ。そう思いながら俺は愛機に搭乗した。簡単なフライテチェックを終

え、隊長機と共に滑走路へ向かつた。

無線「アルファ隊の滑走路進入を確認。そのまま離陸せよ。」

隊長「こちらアルファ、了解！アルファ 6！行くぜ！」

「了解！」

スロットルを全開にし、俺達は地を離れるのだった。

ドッグファイト

隊長「アルファ1よりシャーク4・6。現在の状況を教えてくれ。」
無線「シャーク4・6よりアルファ1、目標は国籍不明機、すでに
傭兵機が5機落とされてる！」の舞は踏むなよ！位置はレーダーを
見ろ！」

「国籍不明機がマイアミに侵攻つて、リアルACAHだな！」
そんな事を口にしていた俺の脳内では、まさにあの序盤の激しい曲
が再生されていた。そして、レーダーに敵影が映つたと同時に、突
然のミサイルアラート。間一髪でそれをかわし、敵機の後ろにつく。
「まだミサイルは使わないぞ・・・。ミグなんざ機銃で十分だ・・・。
。」

周りを見る限り、相手の戦闘機はミグ21、29である。スホーイ
がいなだけ幸運である。順調に3機目を撃墜した。

隊長「なかなかスジがいいな新人！俺が飛び始めた時よりは上手い
ぜ！」

「ありがとうございます！」

4機目の後ろについた時だつた。俺は目の前の目標だけを必死に追
つて周りを見ていなかつた。気がついたのは、警告がミサイルアラ
ートに切り変わつた時だつた。すれ違ひざまに敵はミサイルをこち
らに放つた。そのミサイルは、今俺の位置からして、到達箇所はコ
ックピットだつた。避ける事もどうする事もできない。

「終わった・・・。」

その時だけ本当に目の前の映像がスローに見え、今までの人生が走
馬灯の如く蘇つてきた。

「死んだら・・・どうなんだろ・・・。」

ミサイルが当たつたのだろう。自分の眼前全てがまつ白になつた――

――

俺は、新人の機体にミサイルが放たれた瞬間を見た。もはや避けようもない、至近距離でのミサイル攻撃。

「クソッ！新人！！」

そう叫んだ瞬間、目の前が真っ白に光った。ほんの数秒の出来事だつた。

気がついたら、撃墜されて爆発しているF-16の姿はそこには無かつた。

異世界からの訪問者

「ほい。5機目を撃墜つと。後はあの『力いのだけだナ。』

第501統合戦闘航空団に所属しているウイッチである私エイラ・イルマタル・コーティライネン小尉は今日も敵であるネウロイと交戦していた。ここ数日ネウロイの出現率が異常に高くなっている。

昨日の夜だつて、サー二ヤと私とで哨戒任務を遂行中に大型のネウロイが現れた。昨日の今日でさすがに疲労感を感じる。

「ハア・・・・。もういい加減にしてくれよナ～。」

残りは大型ネウロイ一機のみ。今日空に上がつているウイッチ達は一斉に敵をたたみかけようとしている。ところが、何度攻撃しても一向に心臓部であるコアが出てこない。

ゲルト「くつ・・・・。このままではうちがあかないぞ！」

宮藤「もう弾がありません！！」

シャーリー「こっちも切れた！どうすんだよー！このままじゃ基地がやられるぞー！！」

私の使つているMG42もついつき弾を切らしてしまつた。そして、さらに私達に追い討ちをかけるような情報が隊長であるミーナから伝えられた。

ミーナ「10時方向より未確認飛行物体！まだ確認できていないけど、おそらくネウロイ！今から待機中の全ウイッチを空に上げます！それから扶桑海軍の戦闘機も戦闘に参加します！みんな、何とか持ちこたえて！」

私達ウイッチに加え戦闘機も上がつてきた。しかし、やはりいくら撃つてもコアは見えてこない。大きくて動きの鈍い扶桑の戦闘機は次々落とされていく。

宮藤「ああ！私達の国の戦闘機が・・・。」

サー二ヤ「弾切れです・・・どうしよう・・・。」

サー二ヤのフリーガーハマーでもこの状態。私達はもうすすべも

ない。このまま基地が侵略されてしまつのか、皆がそう思つたその時だつた。

10時の方向からなにやら煙を吐いた矢のよつなものが飛んできた。

坂本「お、おい！何だあれは！」

その矢はネウロイに衝突したと同時に大きな爆発を起こした。すると、あの巨大なネウロイが一瞬にして白いかけらとなつて粉碎した。シャーリー「おいおい・・・何だありや・・・どこかの国的新兵器か？」

ミーナ「10時方向から・・・あれは・・・飛行機？ネウロイではなかつたのね！でも、プロペラが無い飛行機つて・・・」

私達の目の前に現れたのは、奇妙な形をしたプロペラの無い飛行機のような物体だつた・・・。

ファースト・コンタクト

怖くて目を開けられない。そうだ。俺は死んだんだ。何も怖がる必要などない。思いきって目を開けてみる。

「あれ・・・何でまだ戦闘機に乗ってるんだ・・・?」

俺の機体は本来なら鉄クズの塊になっている状態なのに。主翼も、尾翼も、何よりも直撃した筈だったコツクピットもすべてダメージを受けていなかつた。レーダーやその他電子機器も全てクリアだ。しかし、自分が今飛んでいる場所に愕然とした。

「海・・・?俺はマイアミの上を飛んでた筈だ・・・。」

マイアミのビルの群がる中心街のすぐ上を飛んでいたが、撃墜されたと思ったら、何もない海の上を飛んでいた。その時、レーダーに反応があった。

「アンノウン?このいびつな形のはなんだ?」

俺がレーダーで見たのは、爆撃機よりもはるかに大きい飛行物体だつた。さらに、その物体の周りを飛び回っている戦闘機らしきものを確認した。

「でも、戦闘機がこんな小さく表示されるワケがない・・・。こりや人間サイズだ・・・。」

そして微かに無線らしきものも聞こえる。俺は、無線の感度を上げる。

無線「隊長!もう弾がありません!...」

無線「くつ・・・。一体どうすれば・・・。」

若い女性の声が聞こえる。言っているコトは軍事的な事だけど、女の子のような声ばかりである。何より男性の声が一つも聞こえてこなかつた。そして、俺は信じられない光景を目の当たりにする。

「人・・・が・・・飛んで・・・。」

そこには、足に何かを付けて飛んでいる人間らしきモノがいた。それだけではない。レーダーに映っていた巨大な影は、紛れもない今

朝夢で見たあの巨大生物？だつた。

「何だ・・・また夢か？でも手足の感覚はある・・・意識もハッキリしている。」

無線「くそつ・・・基地到達まであと一キロ・・・。」

無線「誰か・・・助けて！」

この無線は明らかにあの生身で飛んでいる人間の声だつた。そして俺は、その巨大な物体を落とす事に決めた。レーダー表示をアンノウンからターゲットに切り替える。

「覚悟しとけよこのバケモノ・・・。」

武装を長距離空対空ミサイルに切り替える。

「ターゲットロック・・・今だつ！ミサイル発射！」

主翼下から勢い良く発射するミサイル。そのまま巨大生物らしきモノの中心に直撃。爆発が起つた後、全体が白く光り粉々に粉碎した。

「よつしゃー！アンノウン撃墜！つてか生身で飛んでるヤツ一体なんだよ・・・メツチャニッち見てるし・・・。」

彼女らとの出会い

無線「あの機体は何だ？また……人らしき物が見える！」

無線「どこかの国の中型の戦闘機か？」

空を飛んでいる彼女達は口々に言つている。俺は、無線で応えようとする。

「こちら、アメリカ空軍第108航空団、外国人傭兵航空部隊所属のアルファ6。聞こえたなら、返事をしてください。」

無線「よく聞こえます。私は、第501統合戦闘航空団の隊長です。しかし、国籍をもう一度確認させてください。」

無線「ちょっと待て、U.S Air Forceって私の国じゃないか！～へえ～いつのまに新型の戦闘機なんか作つてたんだ？ちょっとよく見せてくれよ～！」

そつと近づいて一人こちらに近づいて来る。両足にはプロペラのようない物が付いた履き物？が付いていた。しかしうざけているのか、頭に兎の耳、ケツには尻尾が付いている。そして、一番の疑問が、「履いてない？！」

やはりどう考へても夢だ……。しかし、俺は死んだ筈。敵機と交戦して撃墜された。これだけは絶対に夢なんかじゃない。だとすると、これが死後の世界なのか？どつちにしろ、俺は今（現在）を楽しむ？事にした。

少女「ハロー！私はリベリオン空軍のシャーロット・E・イエーガー大尉だ！」

彼女の声は無線から聞こえてきた。

シャーロット「あんた、リベリアンだよな？」

「いや、俺はアメリカ空軍所属の傭兵だけど……。」

隊長「アメ……リカ？そんな国聞いた事ないわ。ふざけないで質

間に答えて下さい。いいですね？」

「いやいやいや、アメリカですよアメリカ！～そつちに何言つて・

・・。」

すると、接近して飛んでいるシャーロットと乗る女の子が真剣な顔で聞いてきた。

シャーロット「U・Sの意味は・・・何だ？」

「何つて、United statesでしょう・・・。」

「隊長」後でリベリオン最高指令に確認します。とりあえず今はあなたを拘束しなければなりません。我々について下さい。」

「ハア・・・了解。撃たないでくださいよ？」

こうして俺は、彼女の部隊に拘束される事になった。

拘束されちゃいました。

「アルファ6より当基地管制塔、滑走路への着陸許可を。」

管制塔「了解、国籍不明機。着陸を許可する。」

「滑走路へのapro-チ開始。」

ゆっくりと旋回し滑走路へ機首を向ける。

「進入コース、適正。ギアダウン。」

シャーリー「おおっ！車輪出きた！」

ゲルト「何を興奮しているリベリアン。所属も国籍もわからないやツに、もしかしたら敵という可能性もある。」

シャーリー「・・・あいつは敵なんかじゃないよ。田を見て分かった。現に私達を守ってくれたじゃないか。」

坂本「それにして、私達の攻撃が全く効かなかつたネウロイを、一撃で倒してしまつとは。あの戦闘機らしきモノは、詳しく述べなければならん。」

ミーナ「そうね。直接私達の田で確かめる必要があるわ。」

そして俺は滑走路に無事着陸、と同時に機体を基地守備兵達に取り囲まれた。皆驚いた様子で機体を見ていた。

守備兵「言つ通りにすれば手荒な扱いはしない。両手を上げて降りて来い！」

「なんでMP40なんか構えてんの？ナチ野郎のコスプレかよ。」

そう言いながら風防を開け、言つ通り地に降り立つた。

守備兵「確認しろ。」

その場でボディチェックをされる。

守備兵A「拳銃だ！これはリベリオン製だな。やはりお前リベリアンか？」

守備兵B「なぜこんな重い装備をしている？」

守備兵C「待てよ・・・？コイツの顔立ちは扶桑じやないか？」

彼らは口々に聞いてくる。その時、

? 「あなた達は自分達の持ち場に戻つて。その捕虜は私が直接拘束します。」

彼女がそう言うと守備兵達は素直に離れていった。すると、彼女はうつ伏せで倒れている俺に手を差し伸べた。その表情は、とても優しげだった。

? 「初めてまして。私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。先程は私の大切な仲間達を助けてくれて、本当にありがとうございます！」

彼女は深々と頭を下げる。しかし、履いてない。

「いえ、どう見てもあれは助けなきやと思ったんで。あ、申し遅れました。アメリカ空軍傭兵航空隊所属の名無し（読者自身の名前でもどうぞ）です。階級はありません。」

俺は自己紹介をする。正直ここまで優しくされるとは思つても見なかつた。

坂本「さて、まず何から話そうか?」

昔の日本海軍の制服らしきモノを着ている坂本といつ女性が言つ。因みに俺は今この基地内のどこにある小部屋に閉じ込められてる。両手を縛られてはいけないが、一応拘束という事らしい。そして、女性が2人。

ミーナ「じめんなさい。あなたの国籍をもう一度伺つてもいいかしら?」

「生まれは日本、傭兵として今はアメリカ合衆国の方に居ます。いや、居ました。かな?」

ミーナ「居ました? どういう事?」

中佐が聞いてくる。俺は、此処に来るまでの事を全て話した。

坂本「なるほどな・・・。ではお前は死んだ瞬間に我々の世界に來たと?」

「俺だつてそんなの信じません。けど、あなた達が生身の体で空を飛んでいるのは、俺の世界じゃ有り得ない事なんです。しかも、聞いた事もない国籍も出てくるし・・・。」

ミーナ「たしかに嘘を言つているように見えないわ。それに、貴方が今朝見た不思議な夢・・カールスラントは私の故郷なのよ。」

坂本「しかし、ネウロイのカールスラント侵攻は半年、いや、もうと前の話だ。」

ミーナ「そうだわ・・・美緒、トゥルーデを読んで来てちょうだい。彼女があの時不思議な体験をしたってたしか聞いたわ。」

坂本「わかった。ちょっと待つてくれ。」

そう言い坂本少佐が出ていく。しかし、2人共あの若さで少佐と中佐つて・・・。

ミーナ「そうそう。これ、トゥルーデが拾った拳銃なんだけど、ロマニヤ製なのは確かなのよ。メーカーに確かめてもらつたんだけ

ど、こんな見た事もなければ作った事もないって。あなた、わかるかしら？」

中佐は拳銃を俺に差し出した。

「M9……これ、俺のですよ……マジかよ……じゃあれば、夢じゃ——」

坂本「連れて來たぞ。」

頭が真っ白になる瞬間、坂本少佐が戻ってきた。隣には、全身ナチスグレーの服を着た女性がいた。驚いている様子でこちらを見ている。

坂本「紹介する。カールスラント空軍のゲルトルート・バルクホルン大尉だ。ん? どうした大尉?」

ゲルト「お前……お前だつたのか……！ 覚えていいか? ! お前が……いや、貴方が……妹のクリスを助けて……」

「クリスって……やっぱりあれは夢なんかじゃなかつたって事かよ? !」

ミーナ「あなたが……その拳銃で歩兵型ネウロイを倒してくれたおかげで、トゥルーデの妹のクリスちゃんが助かつたのよ……」

魔法が存在する世界（2）

ゲルト「本当に何と言つたらいいか……それに、先程もつ……」

坂本「少し落ち着け大尉。すまないな。コイツは妹の事となるとこ
れだからな。」

そう言い坂本少佐は苦笑いをしている。

「とにかく、あの後無事だつたんなら良かつた。妹想いのいい姉ち
ゃんを持つて、クリスちゃんも幸せモンだ。」

ミーナ「名無しさんつて・・優しいのね。ちょっと感心しちゃつた
わ。それと、私からも言わせてもらうわ。クリスちゃんを助けてく
れてありがとう。」

「いえ、困った時はお互い様です。助け合いは、人の道つて言つじ
やないですか。」

坂本「うむ。正にその通りだな。私も見習うとしよう。」

少佐はうんうん、と頷いている。その時、部屋全体に腹の虫が響い
た。

「ハハ・・・すいません・・・。朝食取れなかつたんで・・・。」

坂本「ハツハツハツハツ！やはりお前も人間だな！」

少佐は豪快に笑っている。

ミーナ「フフ・・・そうね。食堂に移動しましよう。続きはそこまで。」

「あの、信用してくれるんですか？」

坂本「ああ。お前のその目を見れば解る。だろ？ミーナ。」

ミーナ「ええ。それに、あのプロペラの無い戦闘機についても、詳
しく教えてもらわないといけないわ。」

「はあ・・・そうですか。」

ゲルト「・・・ミーナ。男女交遊禁止令は大丈夫なのか・・・？」

バルクホルン大尉が心配そうに聞いている。

ミーナ「大丈夫。この人に限つては。私は信じるわよ？」

中佐がそう言つと、大尉の表情が明るくなつた。

ゲルト「そ、そーガー！では、名無し。」この借りは、必ず返す。絶対に。」

彼女は真剣な表情でこちらを見ている。

「おう。その時は頼んだぜ。」

俺達は力強く手を握り合つ。いや、痛い。痛いですぜ大尉。

坂本「食堂に皆を呼ばづ。それと宮藤とリーネに飯を作つてもらわんとな。」

「すんません。ご迷惑かけます・・・。」

坂本「ハツハツハツ！そーかしこまるな。さあ、食堂に行くぞ！」

こうして俺は食堂に向かう事になった。

魔法が存在する世界（3）

俺は今、食堂に来ている。そして、テーブルを取り囲むようにウイツチと呼ばれる女の子達が座っている。彼女らの視線が痛い。

ミーナ「今、宮藤さんとリーネさんが料理を作ってくれているわ。もう少し待つていて頂戴。」

「あ・・了解です・・。」

エイラ「なあ、一撃で巨大ネウロイを撃墜したあの兵器はなんダ？」たまたま隣の席に座つていて興味無さげにこちらを見ていたエイラ少尉が聞いて来る。

「ああ。ミサイルだよ。簡単に言えば自分が狙つた目標を自動で追尾してくれるロケット砲みたいなもんかな？」

エーリカ「え、超便利じゃん。いいな～。」

そつ言つのはハルトマン中尉。

宮藤「あ、あの・・どうぞ・・・。」

「あーすいません。あざーす。」

宮藤軍曹からご飯が運ばれる。

宮藤「お口に合うかどうか・・・。」

因みにメニューは、白飯、鮭の塩焼き、味噌汁、お新香といつ基本的な和食だった。ハツキリ言つて死ぬ程ウマい。

「大丈夫。メチャクチャ美味しいよ。ありがと。」

宮藤「い、いえ、そんな・・／＼／＼」

彼女は照れくさそうにしていた。

そんなこんなで飯を食い終わつた俺は、中佐からこの世界の事を詳しく教えてもらつた。

「じゃあ、そのストライカーゴニットって魔法で動いてるって事ですか？魔法なんて俺の世界じゃおどぎ話の存在なんだよな。」

ミーナ「魔法の存在しない世界なんて、信じられないわ。」

坂本「だがその代わりに物理的な攻撃力は我々より秀でているとい

うわけか・・・」

シャーリー「その答えが、あの戦闘機って訳だら?色々と見たけど、
ありや夢のジェットエンジンだぞ?!.速度、幾ら出るんだ?」

シャーリーが興奮しながら聞いてくる。

「フル武装しても、マッハ2ちょいは出るかな?」

シャーリー「だあああ――――――――――!」

奇声を発すると彼女はそのまま倒れてしまった。スピード狂か。
ミーナ「そりだわ・・・明日の午前中に飛行訓練があるので、
あなたも飛んでくれるかしり?」

中佐が突如口にした。

「飛行訓練……ですか……。」

ミーナ「体の調子が良くないのなら、無理しなくてもいいわ。」

飯は食べたけどハツキリ言つてメチャクチャ疲れている。色々な事がありすぎた。そもそも俺は死んだのか？別世界に来たなんてそんな事有り得ない。いや、そんな事どうでもいい。とにかく俺はこの部隊の一員にされるらしい。

「明日ですか？大丈夫。俺も飛びます。その代わりと言つちゃんとですが戦闘機の整備は自分にやらせてください。」

ミーナ「ええ。わかつたわ。それから、あなたの部屋を用意しないとね。その辺の事考えておくから、あなたはこの基地の散策でもしてみるといいわ。」

「えつ？いいんですか？そんな……。」

坂本「お前の拘束は、あの小部屋を出た時点で解除になった。それに・・・」

ミーナ「ええ。あなたは私達の・・いえ、この基地みんなの命の恩人よ。だから・・・ね？」

中佐が優しく微笑む。そして彼女ら全員納得したような顔をしていた。

ミーナ「では、一時解散。」

中佐がそう言つと一人の少女が聞いて来た。

エイラ「なア。もし良かつたら基地でも案内してやううか？」「少尉がそう言つと皆がえつ、とした顔をした。

エイラ「なんだよオ。私だってたまには手助けくらうとするに決まつてるだろ？ほら、行くぞ、名無し。」

サーニャ「エイラ、私も行く・・・。」

「えつ、ちょ、シャツ引っ張らないで、伸びる~」

俺は無理やり連行される。そして、ハンガーに出る。

「へえ～格納庫からそのまま滑走路になつてんのか。これならスクランブルも余裕だな。」

そして、格納庫の奥に俺の愛機があつた。

エイラ「なア、ジヒツトエンジンって本当なのか？」

「ああ、俺達の時代じゃもう当たり前の代物だよ。これは単発だけど、双発のもつとデカい戦闘機もあるんだぜ？」

エイラ「そういえば、これは何て名前なんだ？」

「F-16Cファイティングファルコン。小型の対空戦闘機。」

俺は自慢げにそう話した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5012y/>

ストライクウィッチーズ「F-16Cの介入」

2011年11月30日20時03分発行